

『大阿弥陀經』をめぐって

末 木 文 美 士

一、はじめに

『大阿弥陀經』（『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』）二卷は支謙訳又は支婁迦讖訳と言われ、『無量寿經』の最古の訳として知られているが、甚だ難解である。その理由として、現存する梵本や他の異訳との差異が大きいこと、古訳で訳語が難しいこと、構成が複雑で統一的に理解することが困難であること等があげられる。最後の点に關し、一つの解決法として、全体が同時に成立したものでなく、段階を追つてできたと考えることができる。既に早くからいわゆる三毒五惡段の中国撰述説はあつたが、經典全体を成立史的に見るようになつたのは近年のことである。藤田宏達氏は対告者が途中で阿難Ananda から阿逸Ajita になる点に着目し、前者の方が古いと見た。⁽¹⁾ 静谷正雄氏は阿闍世授記段で前後を分け、それより前の「阿弥陀二十四願經」に、後から「極樂莊嚴經」が付加されたと考えた。⁽²⁾ 色井秀讓氏は静谷氏の説を受け継ぎつつ、

『大阿弥陀經』をめぐって（末 木）

静谷氏が除外した三毒五惡段も「阿弥陀仏過度人道經」とも呼ぶべきもので、インドで成立したと見ている。⁽³⁾

ここでは藤田氏の提示された対告者の変化という点を手掛りに、本經の成立史に關し多少の考察を試みたい。

二、卷上の問題点

卷上は序分に續いて、二十四願を含む阿弥陀仏の本生話を記し、續いて願の成就した阿弥陀仏国土須摩提Sudhamāの情景を述べる。大部分は阿難を対告者とするが、最後の方で一度阿逸に変わり（三〇七～三〇九⁽⁴⁾）、再び阿難に戻つて終る（三〇九a～c）。

i 阿難を対告者とする部分

(1) 本經では願文と成就文は比較的対応がつけ易い。そして、後に見るように成就文の方に發展段階が考えられるとすると、願文も一時に現形が成立したとは考えにくい。この点で注目されるのは、誓願より前に曇摩訶が樓夷亘羅仏の前で

自らの希望を述べる箇所である（三〇〇a～三〇一c）。即ち、そこでは、①成仏後、諸仏中で智慧最勝であり、光明が無極であること、②国土が自然の七宝で極めて軟好であること、③諸仏国に我が名字を聞かせ、衆生を我が国に來生させること、が誓われている。①は第二十四願、②は第三願、③は第四願に相当しよう。しかも、この三願で、阿弥陀仏自身のあり方、その国土、衆生の來生の方法という主要な問題が出揃っている。又、そのすぐ後にはこれらの願の成就文とも見られる一節がある（三〇一a）。大胆な推測となるが、この部分が願文の最古の層を示すと考えることもできよう。

(2) 願成就の第一として、阿弥陀仏の光明が讚美されている（三〇二b～三〇三a）。ここで表現法の上から注目されるのは、阿弥陀仏の光明の絶大を述べる為に、他の諸仏の光明を述べた箇所である（三〇二b～c）。即ち、そこでは「仏頂中の光明七丈を照らすものあり、仏頂中の光明一里を照らすものあり」云々と続くが、その光明の照す距離が、以下、二里・五里・十里・二十里……三百万里・六百万里・一仏国・兩仏国……二十六万仏国・五十万仏国と順に増えている。この数字を見てゆくと、四になるべきところが五に、千二百八十になるべきところが千三百に、というふうに繰上がっているところもあるが、ほぼ前の数字を二倍しながら増えている。このような数字の増加のさせ方は阿難を対告者とする

部分の特徴で、他にも浴池の大きさを述べる箇所（三〇四a～b）、阿弥陀仏国土の菩薩が他仏国の諸仏を供養するのに用いる華の大きさを述べる箇所（三〇六a～c）にも見える⁽³⁾。

(3) 光明讚歎に続いて阿闍世授記の一段がある（三〇三b）。これは従来、後代の挿入と見られていたが、静谷氏らは「阿弥陀仏二十四願經」の流通分と見る説を出した。これは興味深い説であるが、なお問題が残る。突然阿闍世が登場するのは奇妙であるし、この前に光明成就のみ述べられているのも構成上おかしい。又、前述のように数の増加のさせ方など、本段の前後を通して一貫しており、敢えて成立史的段階を異にすると考えなくてもよい。なお今後の検討を必要とする。

(4) 阿闍世授記に続いて、明らかに願文を意識して書かれたと思われる種々の願成就を列挙した箇所がある（三〇三b～c）。その後、講堂・精舎を述べる箇所から阿難部の最後までほぼ一貫した筆使いで仏国土の様子が生き生きと描写されている。ここで用いられている表現技法として、内容的にはごく単純なことを、類似した表現を繰返し積み重ねていくという方法がある。先に触れた数字を二倍ずつしていくのもその一つであるが、他に、例えば七宝の浴池を説く箇所では、「淳金の池は其の水底の沙は白銀なり。淳白銀の池は其の水底の沙は黄金なり」云々（三〇四a）と、まるで順列組合せを楽しんでいるかのようである。同様の例は、浴池上の七宝樹

を述べる箇所(三〇五a~b)にも見える。こうした単純な繰返しの手法がおのずから仏国土の莊嚴を生き生きと描き出し、読者又は聴者を陶然とさせる効果をもつ。ここに本經の作者又はその背景となつた集團の宗教的高揚がうかがわれる。

ii 阿逸を対告者とする部分

阿難部の終りで、摩訶目犍連を引合いに出し、阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢がそれより遙かに優れていることを述べた後、突然、阿逸菩薩が立上り、阿弥陀仏国中の阿羅漢に般泥洹する者があるか否かを尋ねる(三〇七c)。ここから阿逸を対告者として、阿弥陀仏国における舍宅の問題、蓋樓亘^{ṇḍa} Lokiteśvara・摩訶那鉢 Mahasthāmaprāpta 兩菩薩のこと、阿弥陀仏の寿命のこと等と展開する。この部分は先の阿難部と較べて以下のような特徴がある。

(1) 仏国土の描写という面から見て付随的な要素が多い。元來の阿弥陀仏信仰から見て異質と思われるところも見える。例えば、蓋樓亘・摩訶那鉢兩菩薩の出現である。しかも、県官を恐怖することがあれば、兩菩薩に帰命すれば免れることができる(三〇八b)、又、阿弥陀仏の般泥洹の後、この兩菩薩が順次仏国土を支配すると説く(三〇九a)。これらは勿論願文にもないし、元來の阿弥陀仏信仰に含まれない要素ではないかと思われる。又、仏国中の衆生の中に舍

宅を自在にできる者とできない者があり、前者は前世に道を求めた時、慈心に精進して諸善を為したからであり、後者は前世に道を求めた時、諸善を為すことが十分でなかつたからだと言う(三〇八a)。つまり、前世の行業の相違によつて阿弥陀仏国における果報にも相違があるというのである。これは勿論願文になく、そればかりか、仏国中の衆生が同一種類であり、同一心であるとする第九・十願に矛盾するとさえ言えよう。もつとも、阿難部の最後では、前世に道を求めた時の差異に従つて阿弥陀仏が經を説き、須陀洹・斯陀含等の悟りを得させると説かれている(三〇七b)。しかし、そこではあくまで各自の個性に合せて開悟させるという積極面が言われているのであり、ここに於けるように差異が強調されている訳ではない。

(2) 阿難部では単純な繰返しの多い表現で感覺的に仏国土を描写していた。それに対し、本段は理屈が多く、抽象的な議論のような調子になつている。例えば、阿難部では一度も用いられなかつた「所以は何ぞや」という表現が、ここでは短い中に四回も用いられている。又、論述が直接的でなく、途中から問題が外れていく場合が見られる。例えば、阿弥陀仏国中の阿羅漢に般泥洹する者があるかという議論が、阿弥陀仏国中の菩薩・阿羅漢の数に増減がないという議論にvari(三〇七c~三〇八a)、阿弥陀仏の寿命の無極を説いていたの

が、最後になつて阿弥陀仏も般泥洹すると転換する(三〇八c・三〇九a)。こうした複雑な議論の展開は阿逸部の特徴である。

(3) 既に見たように、阿難部では数の多いことを示す際に、順に二倍ずつ増してゆく方法がとられていた。ところが、ここでは阿弥陀仏の光明の永遠性を説く際に、一日・二日・五日・十日・十五日・一月・五月・十月・五歳・十歳・百歳……百千億万歳・一劫・十劫……百億万劫という増加のさせ方をして(三〇八b・c)。これもまた阿難部との相違のひとつである。

以上の諸点から、この阿逸を対告者とする部分が、阿難を対告者とする部分に後から加えられたと推定することは十分に可能だと思われる。

ところで、もしそう推定することが許されるならば、無量寿Amitāyusと無量光Amitābhaの関係についても新しい観点を与えられることになる。即ち、光明無量は願文でも最古と思われる層に属し、かつ、成就文でも最先のところ、阿闍世授記より前にあげられていたのに対し、寿命無量はこの阿逸部になつてはじめて現われる。しかも、その論じ方を見ると、まず光明の極大なることを再説し、その光明に終極する時がないと説き、その理由として、阿弥陀仏の寿命が極めて長いことが持ち出されるのである(三〇八b・c)。このよう

に、本經に關する限り、まず光明無量があり、寿命無量はそれへの付加であると考えられる。このことは、梵本において阿弥陀仏の原語がAmitāyusとAmītibhaにあることに照応する。

iii 再び阿難を対告者とする部分

巻下の最後に再び阿難が登場し、阿弥陀仏国中に須弥山がないのならば、四天王天や忉利天は何に依拠して存在しているのかと問う(三〇九a・b)。いわゆる須弥山問答で、先に願成就文に「其の国中に須弥山あることなし。其の日月星食第一四天王天・第二忉利天、皆虚空中に在り」と述べられていた(三〇三b)ことを踏まえている。さて、それに対する仏の答が奇妙である。即ち、まず「お前は仏に疑いをもっているのか」と反問し、以下延々と仏智の窮りないことを述べる。そこで阿難が恐怖に震えると、最後になつて、この世界でも第三焰天以上は虚空中にあるのだから、阿弥陀仏国の第一・第二天が虚空中にあつても不思議はないだろうと答える。この中間部分は直接の議論とは全く無関係で、まるで仏の權威をもつて阿難を脅しつけようとしているかの印象さえ与える。又、ここでも先の阿逸部と同様に、数の増加のさせ方が一・十・百・千・万・億となつており、先の阿難部と異なる(三〇九b)。こうした点を考える時、この一段は阿難を対告者としていても、やはり後に付加されたものと考ええるの

が適當であろう。

三、卷下の問題点

卷下は阿逸を対告者とする三輩段をもつてはじまる（三〇九c・三一a）。続いて三輩段の重説の部分では対告者が「阿逸菩薩等諸天帝王人民」と加上されている（三一a）。この後、三毒五惡段では呼びかけの形は変わるが、「阿逸菩薩等」云々を対告者とする^①と見てよい。最後に流通分では再び阿難が出、阿難と阿逸が交互に、又は一緒に呼びかけられている（三一b・三一c）。

i 阿逸を対告者とする部分（三輩段）

三輩段は往生の方法を説いた一段として本經中でも重要な位置を占めるが、阿逸を対告者としており、又、以下のような点からも成立が遅れるのではないかと思われる。

(1) 願文に於て三輩往生は第五・七願で説かれる。ところが、生因の願はもう一つあり、第四願で聞名往生を説いている（三〇一b）。これは二十四願の前に三願をとり出した中にも含まれる重要な願で、その成就文は、完全に対応するものはないが、阿闍世授記に先立つ光明讚美の段で、阿弥陀仏の声を聞き、光明を称譽して断絶しなければ、阿弥陀仏国に往生すると説かれている（三〇三a）。この聞名往生と三輩往生の關係ははつきりせず、それが『無量寿經』に持ちこされ、

第十八願と第十九・二十願との關係如何という教学上の問題を引起すことになる。この問題は三輩往生段を後の付加と見るにより解決できよう。

(2) 中・下輩には辺地往生が説かれるが、願文がないばかりか、第三願で国土がすべて第六天の如しと誓われている（三〇一b）のに対し、辺地が「第二忉利天の如し」と言われている（三一〇b、c）のは矛盾する。辺地は卷上の阿逸部に^②おける仏国土内の差別と関連するものと考えられる。

ii 阿逸菩薩等諸天帝王人民を対告者とする部分

三輩再説より三毒五惡に到る部分の対告者は、阿逸ひとり^③の箇所（三一b、三二c、三三a）、「阿逸菩薩等」となっているところ（三一b、三一c、三一d）などもあるが、全体として一纏りのものと見てよいであろう。対告者という面からだけ見ても、阿逸部よりさらに遅れることは明らかである。周知のように、この部分はインド撰述か中国撰述かで争われている。インド撰述説の最大の根拠は、經の構成上、この部分が是非とも不可欠だという点にあり、中国撰述説の最大の根拠は、梵本や藏訳に欠くこと、翻訳とは思われない中国的表現が多いこと等である。しかし、現段階ではいずれとも断定できる強い根拠はないように思われる。ただ、本段に用いられた訳語を前段までのものに較べると、重なるものに関して^④は同一の訳語を用いている点を考えると、たとえ中国付加と

しても、後代のものではなく、訳者自身の手になるものではないかと思われる。

iii 阿難・阿逸を対告者とする部分

經の最後の部分是对告者がやや複雑になっている。即ち、阿難(三一六b)↓阿難・阿逸菩薩等(三一六c)↓阿難(三七a)↓阿逸菩薩(同)↓阿難・阿逸菩薩等(三七b)と変化する。恐らく原形においてはより簡単であつたものが、次第に加上されたのであろう。このうち、最初の部分では阿難に対して阿弥陀仏国土を目のあたりに見せる。『阿闍仏国終』でも往生の方法を述べる前に仏国土現見の一段があり、重要な位置を占めることを考えると、この段は比較的古くからあつたのではないかと思われる。

四、結 び

以上、対告者の変化を手掛りに『大阿弥陀經』の成立過程に推定を試みてみた。最後に、他の諸本における対告者の変化を見ておこう。まず、『平等覺經』では全く『大阿弥陀經』と変らない。『無量壽經』はやや複雑であるから後に回すと、『無量壽如来会』・『無量壽莊嚴經』・梵本・藏訳はいずれも仏国土現見(梵本第三十九章)まで阿難を対告者とし、胎生化生段から阿逸に移る。即ち、全体がはつきり二分されると共に、三輩段を含めて阿難部が大きくなっているのが特徴であ

る。『無量壽經』では、一見複雑に見えるが、基本的には後期の諸本と同じである。しかし、途中に三毒五惡段がはいる為、その部分は「弥勒菩薩諸天人等」となっており(二七四b以下)、その後、再び阿難が出ることになる(二七七c)。なお、胎生化生段に慈氏菩薩と共に阿難が出る(二七八a)ことも、後期の諸本と相違する特徴である。

- 1 藤田宏達『原始淨土思想の研究』(岩波書店、一九七〇)二七三―二七五頁。
- 2 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』(百華苑、一九七四)一〇〇―一〇一頁。
- 3 色井秀讓『大阿弥陀經疑点若干』(印仏研二四―二、一九七六)五九五―六〇〇頁。
- 4 以下、『大阿弥陀經』の引用言及は大正藏一二卷の頁・段を本文中に注記する。
- 5 このような数の増加のさせ方は、他に『長阿含經』卷六、転輪聖王修行品(正藏一―四一b―c)、『十八泥犁經』(正藏一七―五二八c―五二九b)等に見られる。
- 6 菩薩・阿弥陀仏・阿逸・比丘僧・比丘尼・泥洹・泥犁・禽獸・薜荔等
- 7 『阿闍仏国經』卷下(正藏一―一七五九c)。
- 8 但し、『莊嚴經』では途中に阿難がもう一度出る(正藏二―三二五c)。